

禪の友

ZEN
no
Tomo

3

2023



ご本山だより

大本山永平寺【菩提の種まき】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



「暑さ寒さも彼岸まで」とよくいわれますが、正しくは「彼岸会」とい、春分・秋分の日をはさんで前後一週間、先祖の供養やお墓参りをする行持です。永平寺では、お彼岸の中日に法堂で彼岸施食会が修行されます。

仏殿前の梅花も少しずつ綻びはじめ、今春新たに上山してきた雲水も漸く永平寺での修行生活に慣れてまいりました。とはいえ、長年慣れ親しんだ生活とはまるで違う永平寺での日々に、未だ戸惑っている新到雲水もいることでしょう。

道元禪師さまは『正法眼蔵随聞記』で、
学道の用心、本執を放下すべし。身の威儀を改むれば、心も随て転ずる也。

とお示しです。

新到雲水は一たび山門を潜れば、永平寺の家風に習って辨道修行をいたします。しかし、永平寺へ上山するまでの知識や経験が執着となり、中々手放しができません。

そこで、古参雲水や、同じ新到雲水と二十四時間の修行生活を共にし、一挙手一投足を永平寺の家風に随うことで、次第に変化が現れてきます。

今日彼岸 菩提の種をまく日かな

永平寺で修行する雲水衆も、それぞれまかれていた菩提の種が少しずつ芽吹き始めております。



ご本山だより 大本山總持寺

【多聞たもんをこのむこと勿なれ。
直じきに勇猛精進ゆうもうしやうじんすべし】

『伝光録でんこうろく』阿難陀尊者章あなんだそんじや

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



三月の異名といえば「弥生やよひ」が最も一般的です。本草きくさいや弥生いおい茂るしげ（草木が生い茂る）ということばが短くなり、「弥生」となりました。

本山境内にも僅かながら春の息吹が感じられるようになってきました。

それに合わせるように現在、新しい修行僧が順次上山し、お互い和合の精神で辨道精進べんどうしやうじんを重ねます。

標題の瑩山けいざん禪師ぜんじさまのお示しは仏道を歩まんとするには多くの教えを聞くだけで満足してはならない。それを成就する為にも真つすぐに目標に向かって努力をしなければならぬと示されているのです。

仏教の教えの中に聞思修もんししゆの三慧さんえがあります。よく聞き、自分なりに考える、そしてそれを行動に現わさなければ所

詮絵に描いた餅のようなもので何にもなりません。

修行とは今日の自分は昨日の自分であつてはならないという厳しいものなのです。

そういう日々を半年、一年と送るうちに自然と仏さまのかたちに調えられていくのです。

さて、今年は東日本大震災より十二年目となり三月十一日は大祖堂だいそどうで石附いしづき禪師さま大導師にて被災物故者慰霊十三回忌法要を厳肅にお勤め致します。従来行われていた「祈りの夕べ」はこの十三回忌を以て終了致しますが、三宝殿近くの高台に鎮座します「平成の救世観音くぜい」と共に私たちは震災犠牲者の慰霊と復興をいつも願って祈り続けます。行く所存であります。

選・坊城俊樹

寝不足の神も仏も大晦日

三重県 荻屋 奈良美

評

大晦日は神も仏も人間も忙しい。人は年末に一年間の大掃除を終え、年始の用意もせねばならない。神社の神も寺の仏も大晦日に繰り出される人間を待ち受けるために働きづめとなる。まことに神さま仏さまのご苦勞には頭が垂れる思いである。

隙間風マツチの炎くねらせり

岩手県 阿部 熙子

評

きわめて正当なる写生句である。平明にして余韻が深い。「くねらす」という描写も細密にして正確である。だからこそ余韻が深い。ほんの少しの隙間風が侵入してきた。摺ったマツチの炎をちよつと揺らす程度の。暖かて密な部屋の様子も見えてくる。

◆ 警笛を鳴らす都電や秋の風

埼玉県 伊藤 博

◆ 実千両百両ばかり人に分け

神奈川県 堀田 耕一

◆ ジャズ喫茶余韻の帰路の秋夕焼

和歌山県 田崎 よし子

◆ 成道会開戦の日の重みかな

静岡県 村松 保子

◆ 臘八会淡き月見て寺を辞す

島根県 俵 保恵

◆ おほわたのゆらゆら風の継目かな

大阪府 柏原 才子

◆ 住み古りて今は古里帰り花

埼玉県 橋本 永子

◆ 呉服屋の大き暖簾や花八つ手

静岡県 石濱 徹

◆ 小春日や庭に書きたる魔法陣

島根県 金山 陽

◆ 雪吊もビルも都心の池の中

千葉県 長澤 きよみ

選者吟

奥様は大奥様と年の暮

俊樹

作句小見

奥さまとはたぶん大奥さまの息子の嫁。二人して年末の銀座へ和装を召されてしずしずとお買いものへ行くのである。はたして三越か高島屋か。それはともかくこれは俳句吟行会の句である。歌舞伎座から銀座四丁目あたりで吟行するとこんな光景が俳句になる。

選・長澤 ちづ

師走なり黒を引き締め大鴉天狗山より降りて来たるか

北海道 菅原 三江子

評 天狗山は作者の住まう小樽のシンボリックな山らしい。本格的な冬に備えて麓に下りてきた大きな鴉に、威厳のようなものを感じた作者。「黒を引き締め」は羽の色だが、靈性すら帯びている。初句切れも効果的である。

どうにでもせよとばかりに桶底に固まる海鼠ある日のわたし

大阪府 柏原 才予

評 桶の海鼠の様子が擬人化されて詠われているかと思いきや、作者自身の喩えであるという展開が鮮やか。時には開き直るという人生の知恵もあると言われている気もする。

◆ 本堂の総代写真に祖父がゐて法事の最中に見つめ合ひたり

三重県 西村 廣視

◆ 見渡せば遠き高嶺に雪はきて枯れし尾花のそよぐこの朝

鳥取県 徳本 義則

◆ 北風と落葉の時雨街はずれ生家への道いつも見る夢

秋田県 小松 紀子

◆ 鼈甲のブローチに少し見栄をはるOG会のランチのこの日

群馬県 松本 さえ子

◆ 順繰りに人は逝き去り町内の高齢者となり公報配る

山口県 濱田 道子

◆ ありなしの風にもゆれてさまざまな香色たてみる秋の風鈴

鳥取県 眞山 博充

◆ 冬囲い雪に備えて板塀の素木の上に黒ペンキ塗る

北海道 木村 吉伸

◆ こいしさをこころのけんざんにさしていけいつかはわけてはながさくらむ

静岡県 内山 忍

◆ 老いの身に数へ切れざる幸ありて師走の庭に落葉を拾う

愛知県 深谷 ハネ子

◆ 秋雨の二日つづきて何もせぬ罪ある如く夕餉に寄りつ

岩手県 穴戸 さとる

選者詠

抱くたびに尻尾の骨の一文字犬は犬とていのち主張す

ちづ

作歌小見

風鈴の濃やかな音色を秋の澄んだ空気に捉える眞山さん。すべて仮名書きの内山さんは、まだ十代の方、五首も投稿してくださいました。これからもたくさん詠ってくださいね。穴戸さんの作品からは、実直な作者像が立ち上がります。